

第40号

発行／平成23年8月1日
米沢興譲館同窓会
会報編集委員会

当会報の題字は、第19号から
奥山徹石氏(昭和28年卒)
の揮毫によるものです。

米沢興譲館同窓会会報

東京支部総会

平成23年7月9日
於 ホテルニューオータニ



↑当日出席の女性パワー！

このあと、壇上で自治会歌を熱唱。

1部：出身地別、2部：卒業年次別と
席を変えて、にぎやかに実施→



いまこそ呼び起こそう

興譲のこころを

ともに歩く新生のみちを拓くため



平成二十三年

米沢興譲館同窓会総会・懇親会

実行委員長 栗林雄二

(昭和五十一年卒)

創立百二十五年、米沢興譲館同窓会・懇親会は前記のスローガンのもとに、昭和五十一年を筆頭に、昭和五十五年、昭和六十年、平成三年、平成八年が実行委員として準備しております。

東日本大震災が起こった年として後世に記憶に残るであろう本年のテーマとして、一刻も早い東北地方などの被災地の復興を目指す心構えを我々のこころの中に持ち続けなければならないという思いを込めました。

また、平成に入って二十数年経過し、今年の実行委員会にも平成卒の若い学年が参加し、頑張ってもらっています。特に若い学年には、この集りを契機に、同窓であることの縁を感じて、さらに仲間との強い絆を築いていくことを期待しています。

実行委員一同、同窓会・懇親会に向け一丸となって取り組んでおりますので、どうか多くの同窓生の皆様にご参加頂きまして意義深い集いにさせていただきたい旨を申し上げ、ご案内とさせていただきます。

会員の皆様へ感謝

会長 高野 譲



今年三月の

あの大震災では、多くの尊い命が失われました。心より哀悼の意を表しますと共に、被災された皆様に謹んでお見舞い申しあげます。同窓生の中にも、直接間接を問わず、大きな被害を受けられた方々が沢山おられると存じます。とりわけ原発事故の影響はいつまで続くか想像もできません。

こうした中で、同窓会活動も大きな支障があり、四月に予定されていた米沢支部恒例の花見の会も中止されました。五月開催予定だった関西支部総会も無期延期という事態になりました。

しかし、自粛ムードがいつまでも続いたのでは世の中が沈滞してしまいます。できるだけ早い復旧がなされなければなりません。各支部総会も、六月の県庁・教育委員会を皮切りに、七月には東京支部総会も例年どおり盛大に開催されました。その後も例年以上の盛り上がりを見守りました。

す。

さて、昨年から取り組んで参りました同窓会名簿も、会員の皆様および作成に当たった御サントのご尽力により、予定どおりこの七月に完成し、予約された皆様に送られています。これまでより大きな版となり、更に見やすくなったと思います。ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。各方面にわたる活動に、この名簿を活用していただきたいと思います。なお、申し込みをお忘れだった方は、これからでも結構ですので、ぜひ購入をお願いします。同窓会最大のイベントとして、毎年九月十九日に行われる総会・大懇親会は、今年も昭和五十一年卒を中心とする実行委員会が準備を着々と進めています。例年のように、会員の皆様のご協力によりにぎやかな集いとなるようお願い申し上げます。その外、各学年ごとの集まりも、それぞれ活発に行われていますが、こうした横のつながりが、同窓会にとって実質的に一番大事

事なのだと思います。特に昭和後期・平成の卒業生諸君の活動を大いに期待しています。それが同窓会全体の活性化につながるようになります。

この九月の総会で、役員改選があります。川野前会長の後を受けて、これまで四期にわたり会長の職を汚してきましたが、今期限りで退任することになります。立场上、講

ごあいさつ

校長 佐藤 広明



はじめに、三月十一日の巨大地震に伴う被害等について報告しておきます。

本校付近は震度五強の揺れに見舞われましたが、さいわい、校舎等の損傷はそう大きなものではありませんでした。北校舎と中校舎間の渡り廊下のつなぎ目が二センチほどずれ、美術室の石膏像が倒壊したり、講堂天井の両側にある蛍光灯の格子状カバーが落下したのが、中でも被害の大きなものです。

堂建設事業の後始末が終るまでと思ってお引き受けして以来、格別な成果もみないまま過ぎて参りました。その間、会員の皆様の絶大なご協力とお支えによってここまでできた次第です。本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。同窓会が今後いよいよ充実し発展することをお祈りしてお礼の言葉といたします。

講堂一階にある史料室の展示品等に被害はありませんでした。後日の診断で、建物の躯体は問題なしと判断されています。在校生と今春卒業生の全員が無事だったこともあり、たいしたことでした。

三・一一以後の状況は皆様御存知のとおりですが、本校では修了式を含む学校行事や生徒の諸活動の一切を取り止めるなど、計五日間を臨時休業とし、春休み中の部活動の遠征等もすべて中止とせざるを得ませんでした。再発への備えやさまざまな対応に追わ

れて四月の上旬まで息をつく間もありませんでしたが、生徒の健康・安全を第一に、教職員が力を合わせて何とか凌いできたというのが実情です。四月下旬からはほぼ通常の教育活動に復しています。

さて、本校の概況ですが、現在、ひと学年五クラスで、二・三年は理数科一クラスに理系と文系がそれぞれ二クラス構成で、在籍数は合計六百名です。本校では学習活動を中心に、部活動と学校行事とを三本柱として日々の教育活動を展開しています。

学習・進路面では、「授業第一主義」と丁寧な個別指導を旨とした指導を心がけています。今春の卒業生百九十一名の合格実績は国立大学が百二十一名、私立大学は延べ百四十六名、短大等は延べ二十三名でしたが、旧帝大などのいわゆる難関大学や医学部は計二十二名、早・慶は計五名の合格にとどまりました。約一割の生徒が再挑戦します。

部活動は三・一一以後、大きな制約を受けましたが、地区大会では七つの競技で団体優勝し、六月上旬の県高校総体では、フェンシング部が男

米沢興譲館同窓会

平成23年度

総会・大懇親会

ごあんない

- 一、日 時 平成二十三年九月十九日(月曜日)
- 一、会 場 グランドホクヨウ(市内金池二丁目)
- 二、日 程 ①総 会 午後四時
- ②大懇親会 午後五時半

米沢興譲館同窓会会長

高野 譲

平成二十三年同窓会・懇親会実行委員長

栗林 雄二

(昭和五十一年卒)

子団体と男女四つの個人種目で優勝してインターハイ出場、全八種目で東北大会の出場権を勝ち取りました。陸上男子八種競技と柔道女子個人七十八キロ級、水泳女子百・二百メートル背泳ぎ、それにホッケー男女も東北大会に駒を進めました。この他、五つの競技の団体種目でベストエイトに入るなど、生徒たちは素晴らしい活躍を見せてくれました。

登山に挑戦してクラスの絆を強めました。八月末の文化祭や十月の全校マラソン大会といった伝統行事は、今後とも大事にしていきたいと考えています。また、生徒も教職員も地域とのつながりの中で学ぶことを大切に、地域貢献活動にもできる範囲で取り組んでいきたいと思っています。

最後になりますが、「米沢興譲館」という名前が、在校生にとって誇らしく思える学校であり続けるよう、今後とも懸命に努めてまいりますので、同窓生の皆様の変わらぬ御支援をお願いして、あいさついたします。

同窓会のうづき

古稀を迎えて

三六会幹事 香坂 茂 昭

昭和36年卒業の学年会である三六会、以来50年が経過した。50年前と言えどソ連の有人宇宙船ヴォストーク1号に乗ったユーリー・ガガーリンが「地球は青かった!」の名言を残した年、国民年金が始まった年でもある。この節目の年にあたり、今だに好奇心旺盛な吉田悟会長提案によりホームページを開設することとなった。会員の寄稿文で構成されるこのホームページは、200余名の情報交換の場として歓迎されていることか

ら、今後さらに内容を充実してゆきたいと考えている。(学年会唯一のHPとして同窓会HPからリンクできます。ぜひご覧ください。)

隔年開催で行われている総会は、会員である穴戸康裕君当主の白布温泉東屋が定宿なのだが、今年は古稀の祝いも兼ね赤湯でどうかとの話がまとまり、3月6日三六会総会懇親会が赤湯温泉津波で開催された。世話人の南陽市在住島貫実君が宮内熊野大社で雅楽の筆を奏している事もあって、いい機会だからと社殿で古稀のお祓いを受け、身体健固、厄除を祈願した。

開催直前になって、急きよ参加できなかった者もいたが、48名というかつてない大勢の参加者で懇親会は大いに盛り上がった。卒業以来、初めて顔を合わせる人もおり、初めは多少戸惑いがあったものの、あつという間に50数年前にタイムスリップしたような想い出話に思わず顔もほころぶ。長谷川啓二君の司会で

和気あいあいのなか宴が進められた。

挨拶に立たれた曾根伸良先生は我々のちょうど10年先輩、いつもながら若々しい姿にどっちが先輩かと見間違えられる人もいたようだ。宴たけなわ自治会歌、吾妻山上を皆で大合唱。お聞きとなった後も興奮冷めやらず、明け方近くまで大激論を交わしていたグループもあったようである。

欠席通知の通信欄には病氣療養中という文字が散見され、一病息災の常備薬を飲みながらも、この場に出られる幸せを感じた人も多かったのではないかと思う。翌朝、次回も皆が元気で再会することを約束して散会した。



学年の結束を目指して

平成三年度卒 木村 淳一郎

在学中に昭和から平成へと年号が改まった平成三年卒の我々は、西大通から笹野へ校舎移転した後の最初の新入生でありました。諸先輩方と旧き良き木造校舎への想いを共有できないことは誠に残念ではありますが、真新しい近代的な校舎で学べることに大きな喜びを感じました。

学生当時、時代の転換期に遭遇した我々は、長く右肩上がりであった日本経済の衰退や東西冷戦の終焉を目のあたりにしました。しかし、新たな厳しい時代の中で揉まれることで鍛えられ、皆が各分野でがんばっています。今年、2回目の当番学年を任せていただきましたが、卒業してから約二十年、クラス同窓会などもほとんど開かれる機会もなく、職場も住所もバラバラになっている仲間をつないでいく作業はまだまだ難航中です。ローマは一日にしてならずの教えに倣い、学年組

織もゆつくり焦らず…とは思いますが先輩学年の結束の強さが羨ましく、少しでも早く多くの仲間と再会し絆を深めたいものだと感じています。また、今回の震災を受けて、互いの近況もより一層気にかかるところとなりました。

俗に云う「アラフォー」となった我々は、そろそろ色々な場面で中核的な役割を担うべき年代ではないかと意識しています。ですから、同窓会組織の中でも、昭和卒と平成卒をつなぎ、時代は違っても興譲館精神を共有する同窓生が一つになれるよう同窓会を盛り上げていかなければ、と、気負い立つ想いもあります。そしていつの日か「平成卒は…」との言葉の後に、先輩方からの褒め言葉を続けていただけることが目標です。

支部報告

宮城支部 支部長 塚原 保夫



東日本大震災の発生後一〇〇日を過ぎました。亡くなった方々、

近親者を表われた方々に心から哀悼の意を表すると同時に、今、この時間も奮闘している方々に畏敬の念をお送り申し上げます。また、物心ともに援助の手を差し伸べて頂いた全国の皆様に深く感謝致しております。

昨年12月4日に、高野譲同窓会会長と佐藤広明興譲館校長先生を仙台市にお迎えし、興譲館同窓会宮城支部総会を開催いたしました。宮城支部総会の伝統

といたしまして、毎回、様々なテーマにより記念講演を実施しておりますが、今年度は、ご来賓の佐藤校長先生より「草木塔について考える」とい



一七八〇年に最初の塔が建立されたので、興譲館より歴史は新しいのですが、当時から緑(植物)を敬愛する気持ちを形にした方々が郷里にいた(居続けた)ということは、ちょっと意外でもあり誇らしくもあるお話でした。また、先人の業績を詳しく調査し、のちに世に伝える校長先生のような方の貴重な存在を知ったことも励みされ勇気づけられることであります。

この原稿依頼があった際に、同窓会宮城支部事務局を務めている安部雅人博士(農学・東北大学)(昭和63年度卒)から、今回の東日本大震災による被災地域の現場の事情を知らされた。現実には、皆様方も同感の方が多くと思われるが、多くの現場の方々の大変な努力と勇気に

支えられております。現場の生の声として彼らの手紙を紹介したいと思います。



宮城県太平洋沿岸の津波の被害は甚大なものです。震災後の女川町や南三陸町

等を訪れてみると爆心地さながらの様子に唖然としてしまいました。石巻市は広域合併により面積が広がったので、津波による被害のある地域とそうでない地域とがはっきりしているように感じます。

私は、3月9日まで海外にいました。そして帰国後、3月10日から3月11日にかけて女川町におりました。3月11日のお昼に女川町の中心部にある漁港前の食堂にて昼食を取り、その後、14時頃に仙台市に戻り、14時46分の大震災に遭遇しました。仙台市内のビルも大きく揺れました。個人的には、特に怖いとは思いませんでしたが、その後、あのような大津波が太平洋沿岸に押し寄せてくるとは予想しませんでした。現在、国民生活に節電が求め

られている中で、太平洋沿岸の火力発電所のほとんどが停止している状態です。女川原子力発電所は、高台14mの地点にあり、津波の直接的な被害をほとんど受けなかったことや地震発生時にも全号機の原子炉が自動停止しており、現在、全ての号機において、原子炉の温度は100℃未満の冷温状態にあり、安全に停止しております。この地震による発電所周辺への放射能の影響はありません。そうした点では、福島第一原子力発電所の事例とは異なるようです。

現在、宮城県内の電力は、新潟県内等の火力発電所からの供給に依存しておりますが、新潟県から宮城県内に通じている基幹送電系統に、もし不具合が生じれば、これも大停電に繋がります。

電気は、発電・送電・配電の連係がなければ需要家に届かないものであります。最近の世論の風潮では、電力改革による発電部門の自由化を推し進め自然エネルギーの拡大を目指すべきだとの意見が多いようです。しかし、自然エネルギーに限らず発電ビジネスに傾倒するあまり、送電網の整備を軽視してしまふと送電網に負荷をかけすぎて大停電に繋がる恐れがあります。以前、米国のカリフォルニア

で発生したような大停電を引き起こすことにもなりかねません。

今回の福島第一原子力発電所の事故を受けてEUI内では、ドイツ・イタリア・スイス等を中心に脱原発運動が盛り上がりつつありますが、EUでは継続のために送電網がメッシュ状に形成され連係して繋がっているため、国境を越えて電力が融通される点が日本の状況とは異なります。

日本は技術立国です。安定した電力供給があつてこそ、高品質の工業製品も生産できるものであり、国内の工場も稼働するものです。そして、東日本大震災により被害を受けた商業地も電気あつての復興であり、それにより雇用の安定にも繋がります。日本の電気事業は、良質な電気および安価な電気料金を追求した結果が現在の状況にあります。

しかし、今回の福島第一原子力発電所の放射能漏れ事故については、憂慮すべきことであるのは事実です。放射能の拡散がこれほどまでに影響するとは予想しませんでした。福島県全域がパニックになっていることは憂慮すべきことです。表土汚染も深刻なようです。

「日本人は、核の犠牲になりながらも、戦後の経済成長の中で、効率化を推し進めた結果、原子力を電源として選択し、その比重を高めていったことが大きな誤りであった。日本人は、これに對してもっと反対するべきだった」という指摘は大変興味深いものがあります。しかし、放射能による障害は、統計学の問題のため、専門家の間でも、この基準以下であれば、絶対安心という言葉が出ないのが実情であります。そのため、多くの住民が疑心暗鬼に捉われているようにも感じます。

東日本大震災後、仙台市内で開催予定の国際学会やスポーツの国際試合等もほとんどがキャンセルとなりました。その理由は、放射能による影響を危惧していることです。仙台では、現在0.08mSv/hと放射線量が低く、仙台市民も特に心配なく日常生活をおくっておりますが、海外では、狭い日本地図にFukushimaとSendaiが併記されているので、福島に近い仙台は危険であるという憶測がなされております。また、国際的な原発事故の評価ランクがチェルノブイリ原発事故と同じレベル7として判断されたことも悪影響を及ぼしております。

実際、仙台市内に住む留学生

の多くが東日本大震災後、緊急帰国しました。仙台空港は津波による被害により閉鎖されているために成田空港等は外国人の帰国ラッシュにより大混雑しました。知人の研究者の奥さんも、子供二人を連れて直ぐに帰国してしまいました。今でも、「仙台で放射能防護服を着ないで大丈夫なのか」とか「仙台では、放射能汚染により水や食べ物も危険で飲食できないのではないのか」とか聞かれます。

福島第一原子力発電所の水素爆発事故が世界中に映像として流れたことで、海外のメディアは、欧州全土の広範囲に放射能物質が拡散したチェルノブイリ原子力発電所の臨海爆発事故と同一視している点が残念です。人間は視覚で判断します。そのため、周辺諸国を中心に東日本大震災後の東北地方に対する見方は、「同情の念」から「警戒の念」に転換していった点が残念であると思います。

福島第一原子力発電所の放射能漏れ事故の対処については、試行錯誤の面も多く、作業の失敗や遅延だけがクローズアップされ日々報道されておりますが、今回の事故の収束を図るために、作業員の多くが命がけで作業をしております。それでも国内の原子力発電所に対する風

当たりは、大変強く、国内で停止中の原子力発電所の再稼働に對するネガティブな批判も多く感じます。

戦後、日本の科学技術の発展に大きな影響を与えてきたのは「マンガの文化」です。例えば、手塚治虫の「鉄腕アトム」は、科学技術に人類未来の可能性と挑戦をもたらしました。また、高度経済成長時には、藤子不二雄の「ドラえもん」は、科学技術に夢と創造力をもたらしました。しかし、実際には、科学技術は、一歩ずつ前に進むことしかできません。現在のエネルギー政策に対する自然エネルギーへの転換は時代の趨勢としては正しい方向にあるとは思いますが、国民の多くが非現実的な「夢現家」に陥ることに、ある種の危険性を感じます。

米沢の深雪が少しずつ降り積もる雪が積み重なって形成されるかのように、日本の科学技術の発展も少しずつ積み重なって形成されるものであることを再認識しなければなりません。今、東北全体が困難に直面している中で、東北の活力をパワーアップするために「東北は一つ」への挑戦が不可欠であり、米沢興譲館の卒業生も含めた叡智の結集が求められております。

◎平成21年度 同窓会会計決算書 (会計年度平成21年9月1日～平成22年8月31日)

収入の部

項 目	予算額	収入額	増減(△)	備 考
繰越金	913,880	913,880	0	前年度繰越金
入会金	1,365,000	1,351,000	△14,000	7,000円×193名
年会費	2,300,000	1,250,000	△1,050,000	
過年度会費	0	50,000	50,000	昭和36年卒
雑収入	1,120	374	△746	預金利子
計	4,580,000	3,565,254	△1,014,746	

決算額

収入済額 3,565,254 円－支出済額 2,604,199 円
＝残額 961,055 円(次年度へ繰越)

支出の部

項 目	予算額	支出額	残 額	備 考
運営費	1,230,000	1,006,112	223,888	
会議費	100,000	95,082	4,918	理事会等
通信連絡費	50,000	28,980	21,020	郵便切手・往復はがき
需用費	200,000	89,569	110,431	用紙・封筒・弔電
人件費	880,000	792,481	87,519	人件費会計へ繰出し
事業費	2,535,000	1,566,587	968,413	
一般事業費	2,000,000	1,056,779	943,221	各支部総会(旅費・お祝い)、高鍋高校交流事業
卒業記念費	205,000	180,358	24,642	記念品代(193名分)
表彰費	30,000	29,450	550	永年勤続者(2名)
会報費	300,000	300,000	0	第39号会報 7000部
予備費	815,000	31,500	783,500	
予備費	815,000	31,500	783,500	振込手数料・会報印刷費追加分
計	4,580,000	2,604,199	1,975,801	



窓会支部役員

◇高畠支部

支 部 長 登坂 捷一
〒992-0351 山形県高畠町高畠 2152-23
☎ 0238-52-0017

副支部長 梅津伊兵衛 星 寛治
幹 事 長 鈴木 征治
事務局 長 金田 成康

◇赤湯支部

支 部 長 佐藤 有弘
〒999-2331 山形県南陽市二色根 3 7 3
☎ 0238-43-6660

副支部長 石岡 忠一 須藤 清市
事務局 長 三ヶ山岩男

◇宮内支部

支 部 長 山水 克美
〒992-0472 山形県南陽市宮内 3 1 7 2
☎ 0238-47-7055

副支部長 長谷川 剛 高岡 亮一
幹 事 長 樋口 一志

◇小国支部

支 部 長 高橋 清人
〒999-1353 山形県西置賜郡小国町
大字兵庫館 2-3-14

☎ 0238-62-2714

副支部長 伊藤 通芳 小林新太郎
事務局 長 高野 健人

◇長井・西置賜支部

支 部 長 松下 鈴三郎
〒993-0007 山形県長井市本町 1-9-27-3
☎ 0238-88-2538

副支部長 井上 俊雄 芳賀 康雄
代表幹事 渡部 秀一
事務局 長 斎藤 道郎

◇県庁・教育委員会支部

支 部 長 相田 信
〒990-2332 山形県山形市飯田 3-7-3-8
☎ 023-634-5680

副支部長 渡部 慶蔵
幹 事 長 若月 雅博

◎校内同窓会役員

理 事 板倉 昭夫 石黒 宏治
幹 事 伊藤 孝 我妻 盛雄 船山 洋子

◎平成22年度 事業計画

- ①母校振興発展に必要な事業 ②会員の親睦に関する事項 ③会報の発行
④名簿の発行 ⑤その他、目的達成に必要な事項

◎平成22年度 同窓会会計予算書 (会計年度平成22年9月1日～平成23年8月31日)

収入の部

項 目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)	備 考
繰越金	961,055	913,880	47,175	前年度繰越金
入会金	1,358,000	1,365,000	△7,000	7,000円×194名
年会費	2,300,000	2,300,000	0	昭37～平13年まで5万円(40学年)、昭27年～36年まで3万円(10学年)
雑収入	945	1,120	△175	預金利息
計	4,620,000	4,580,000	40,000	

支出の部

項 目	本年度予算額	前年度予算額	増 減	備 考
運営費	1,260,000	1,230,000	30,000	
会議費	100,000	100,000	0	理事会等
通信運送費	50,000	50,000	0	郵便切手
需用費	180,000	200,000	△20,000	慶弔・事務用品
人件費	930,000	880,000	50,000	人件費880,000円+50,000円(9月手当)
事業費	2,515,000	2,535,000	△20,000	
一般事業費	2,000,000	2,000,000	0	各支部総会、ホームページ、高鍋高校交流事業
卒業記念費	200,000	205,000	△5,000	記念品代(194名分)
表彰費	15,000	30,000	△15,000	永年勤続者(1名)
会報費	300,000	300,000	0	印刷費
予備費	845,000	815,000	30,000	
予備費	845,000	815,000	30,000	
計	4,562,000	4,580,000	40,000	

米沢興譲館同

◎本 部

会 長	高野 譲			
副会長	大友 恒則	小林 擴二	中條 淳子	
監 事	野口 義人	江部 寛	土田 一成	
常務理事	遠藤 岩根			
常任理事	星野 武雄	小野 隆夫	平山孫兵衛	
	小嶋彌左衛門	渡辺 節子	佐野 隆一	
	鈴木 基	加藤 英樹	佐藤 詠一	
	安部 徳朗			

◇米沢支部

支 部 長 早川 正信
〒992-0054 山形県米沢市城西3-2-36
☎0238-22-6780

副支部長 菅野 武巳
監 事 安達 治雄 安田 道隆
幹事長 相田 修一
事務局長 栗林 雄二

◇東京支部

支 部 長 神野 民夫
〒187-0044 東京都小平市喜平町3-2-2-506
☎042-321-8047
副支部長 吉田 仁志
幹 事 長 宮坂 孝夫

◇関西支部

支 部 長 堤 伸隆
〒573-1121 大阪府枚方市楠葉花園町5-1-1203
☎072-851-4848
副支部長 佐藤 吉憲 吉田 真
幹 事 長 佐藤 和栄

◇宮城支部

支 部 長 塚原 保夫
〒981-0952 宮城県仙台市青葉区中山5-7-33
☎022-278-3063
副支部長 和田美知子 御供 政敏 森下 和夫
幹 事 小林 令児 矢尾板範子 大武 清夫
小関 隆久 高木 三男 猪俣 良市
加藤 啓二 高橋 義彦 熊坂 仁
山水 忍 鈴木 利実
事務局長 安部 雅人

◇山形支部

支 部 長 堤 孝雄
〒990-2494 山形県山形市末広町9-8
☎023-624-0466
副支部長 後藤 寛 竹田 篤永
幹 事 長 生亀 壽子
監 事 岩沼 甫 大内 勇
幹 事 横井 洋子 高橋 宏一

宮崎県立 高鍋高等学校との学校間交流

生徒課 柿崎 悦子



本交流は、平成十一年に高鍋高校の職員のみなさんが本校を訪問され、それを機に始まりました。歴史的な縁をもつ高鍋と米沢に学ぶ高校生が交流することによって、互いに多くのことを得ることができるとは思いません。かといふことでした。翌年に、上杉鷹山公生誕二百五十年祭に因りて米沢市から補助を頂いて交流が始まり、今年で十二年目を迎えます。最初の二年間は、相互に行き来していましたが、その後は年に一度交互に訪問することになりました。この間、同窓会より多大なご支援を頂きながら、生徒自治会執行部

を中心として、両校の生徒が有意義な交流会を開催しております。このことについて、同窓会の皆様に心より御礼を申し上げると共に、第一回交流会の「上杉鷹山公の教習に学ぶ」というテーマを一番に掲げながらも、二十一世紀を造る人材を育てるという目的を持って、創造的で未来につながる交流会にしていかなければならないと気持ちを新たにしているところです。

昨年度は、本校が高鍋高校を訪問しました。紙面をお借りして、その交流の内容について報告いたします。訪問団は、校長を団長とし、自治会長始め生徒六名と職員二名の、総勢八名です。交流会は毎年、歓迎式典などの他に大きく三つの企画で構成されています。一つは史跡や名所を訪れ歴史をたどることによって高鍋と米沢の深い縁を知ることです。二つ目は、同じ学年のホームルームに招かれて、自校の学校生活や郷土の特産物などを紹介したり、部活動に参加したりして交流を深めることです。三つ目は、両校の生徒会

執行部が、現在の活動について発表し意見を交換しながら、これからの生徒会の在り方について議論することです。これらの交流をとおして両校の生徒達は、先人の偉大さを知り、また、自分たちとは異なる価値観に触れることによって、新たな考え方を身につけることになりました。将来、何らかの形で高鍋や米沢にいい影響を与えてくれるであろうと期待しています。

昨年は、太平洋の荒波が押し寄せる断崖の洞窟に社殿を構える鶴戸神宮にお参りし、両校の末永い交流を祈念することから始まり、高鍋城址や歴史資料館を巡った後、秋月家墓所を訪問し献花しました。また、日本を代表する児童福祉・教育の先駆者といわれる石井十次記念友愛社では、その志の大きさに生徒達は感銘を受けた様子でした。川南町JAでは、宮崎県で猛威を振るった口蹄疫の話を伺い、本校生も募金活動をしたが、想像以上に大変な状況であったことが分かって驚きました。交流会最終日には、西部原古墳群や青島神社も案内していただき、名残惜しい気持ちになりながら南国宮崎の風に吹かれました。

ホームルームでは、本校や米沢を紹介し和やかな交流になり、置賜井クイズでは、大変な盛り上がりを見せました。部活動交流では、少ない時間ながらも一緒に汗を流しました。



一昨年高鍋高校が来校した折には、蕎麦打ち体験をしながらの昼食会となりましたが、高鍋高校では、宮崎県の郷土料理である冷汁とチキン南蛮を一緒に調理しながら美味しくいただきました。これらの活動で、生徒会執行部だけでなく多くの高鍋高校生と交流することができ、生徒達はとても楽しんでいた様子でした。

本校の自治会執行部が大変力を入れていたのは、高鍋高校の生徒会執行部との交流です。お互いの活動を紹介しあい、生徒会や行事などの運営方法や、委員会活動などについて意見を交換しました。最後は、リーダーとしての在り方や生徒会の今後の展望などを熱く語り合いました。

この交流会では、高鍋高校はもとより、高鍋町あげての歓迎を受け、心に残るものでした。交流会を終えて、本校生は、高鍋高校生の団結力や目的意識の明確さ、礼儀正しく明るい姿をみて、様々な思いを持ったようです。その思いが、今後の生徒自治会活動を盛り上げるエネルギーになると確信しております。そして、今後もこれをきっかけに、生徒達が交流を続け、高鍋と米沢の文化や人の交流へも発展することを期待しております。

昨年度の交流会については、本校のホームページ上の「生徒自治会」に掲載しております。御覧ください。

第十四回目の今年は、十月に高鍋高校が来校し交流会が催されます。現在、交流内容について検討しているところです。

最後になりましたが、同窓会の益々の御発展を祈念申し上げます。今後本校の教育活動について御理解と御支援を賜りたくお願い申し上げます。